広報
ものづくり
新春号

「ものづくりの街　鈴鹿」にふさわしい支援室を目指して

鈴鹿市ものづくり動く支援室
代表　大原　勝

新年明けましておめでとうございます。

皆様方におかれましても希望に満ちた新春をお迎えの事とお喜び申し上げます。

『鈴鹿市ものづくり動く支援室』も発足以来二年目に入りました。活動に対する心構えも、中小企業の更なる発展のため、新しい気持ちで取り組む所存です。発足以来目標に掲げています「ものづくりの街　鈴鹿」の発展の為に、支援室の特徴を発揮しながら活動をおこなってきました。色々な施策が功を奏してきており、お蔭様で利用、活用していただける企業は、増加の一途を辿っています。

世の中の景気は一般的には好景気に向かっていると言われていますが、中小企業全般までには浸透して来たとは言い難い状況です。本年は好景気の波に乗る非常に良い大切な一年になると思います。この時期こそ体質改善、体力強化のグッドタイミングだと思います。また、既成概念からの脱皮と、次なるステージへの飛躍の礎として、しっかりした地盤固めをする一年だと思います。

我々「支援室」一同も、その理念に基づき　更に中小企業の皆様のお役に立てるよう、努力して行く覚悟を再認識して、新年をスタートしました。新しい施策を多々用意して利用し易い「支援室」を目指して頑張ります。

一例としては、長い歴史と経験とノウハウで企業に信頼を得ている鈴鹿商工会議所との強力なタイアップ、地域の大学や高専とも協調しながら支援活動の輪を広げていければと考えておりますので是非ご期待ください。現在ご協力をいただいていますアドバイザーの皆様には、益々拡大して行く支援室活動により活躍の場は今まで以上に多くなることが予測されますので更なるご協力をお願いします。あらゆる支援要請に応えられる様にアドバイザーの充実も計りながら「使っていただける支援室」、「頼りになる支援室」「喜んでもらえる支援室」に向けて実績を上げながら信頼を高めていきたいと思います。鈴鹿市にとって無くてはならない「支援室」にしていきます。その成果が認知度を高め、企業の皆様に支持していただけることになると信じて、地道に着実に活動していきます。この活動を継続することにより、鈴鹿市の中小企業が活性化し、元気になり、素晴らしい「ものづくりの街　鈴鹿」が実現出来たら喜ばしいことだと思います。支援室の力を結集して今年一年の飛躍を誓い合いたいと思います。

最後に皆様のご健康と、ご多幸をお祈り申し上げます。

発行
鈴鹿市ものづくり動く支援室
代表　大原　勝
鈴鹿市飯野寺家町816番地
鈴鹿商工会議所3階
TEL059-384-0880
FAX059-384-0868
E-mail: shien@mecha.ne.jp
所管
鈴鹿市産業振興部産業政策課

平成十九年　本格取り組みの年にあたり

鈴鹿市長　川岸　光男

新しい年を迎え、謹んでお慶び申し上げます。

鈴鹿市では、昨年四月から第五次総合計画「みんなで築く鈴鹿夢プラン」がスタートしておりますが、「市民一人ひとりが夢や生きがいをもって安心して暮らせるまち　すずか」の実現に向けて、本年もこれを着実に進めていくことで、魅力と活力のあるまちづくりに取り組み、市民が主役となった自主自立した鈴鹿のまちにつなげたいと考えています。

こうした中、昨年四月に鈴鹿商工会議所と連携し、市内中小製造業支援のための「鈴鹿市ものづくり動く支援室」を開始し、早一年近くが経とうとしています。昨年の活動を振り返ってみますと、多くの企業から申込をいただき、企業の課題に応じたアドバイザーの派遣により、支援活動に取り組んでまいりました。支援終了時にお聞かせいただく企業の満足度調査において、概ね高い評価をいただいております。

このことは、アドバイザーの資質によるところが大きい訳ですが、幸い当市においては、自動車関連産業を中心に、機械器具、プラスチック製品、電気機械などの産業が集積しており、アドバイザーも様々な業種にわたり在籍しているという恵まれた環境がございます。

こうした資源を最大限に活かし、様々な課題に対応できるアドバイザーを充実していくことで、より企業の期待に応えられるよう事業の充実を図ってまいります。経営上又は技術上の課題がございましたら、お気軽にこの鈴鹿市ものづくり動く支援室をご活用いただき、企業が活性化していただければ何よりでございます。

こうした積み重ねが、鈴鹿市がより元気になるということにつながると考えておりますので、これからも地道に息の長い活動となるよう取り組んでまいりたいと存じます。

この鈴鹿市ものづくり動く支援室を、より身近に感じていただき、ご活用いただくとともに、より信頼される事業となるよう努めてまいりますので、皆様のご理解を賜りますようお願い申し上げます。

ご紹介　協同組合　三重オートリサイクルセンター

理事長　向井　弘光

自動車産業・モータースポーツの街鈴鹿市において、三重県自動車販売協会、中販連、三重県自動車整備組合、自動車部品業界等の出資によりまさに官民一体となり、協同組合三重オートリサイクルセンターが発足し操業を開始したのは昨年の十一月二十五日であります。

その後は順調に事業展開しており◆二〇〇六年二月／自動車リサイクル法第三十一条、全部再資源化認定取得◆二〇〇六年六月／月間処理台数一〇〇〇台突破◆二〇〇六年十二月／操業開始以来処理台数一〇〇〇〇台突破等、確実に進歩を続けております。

又、月間Aプレス生産は常時全国二位～五位をキープできる体制になってまいりました。

今後の課題としては、より積極的に使用済自動車の入庫促進を営業活動の重点において、その為の体制強化を図ってまいります。

来期、〇七年四月よりの通期においては、年間処理台数一五〇〇〇台以上を達成して全国NO1を目指すとともに、又安定した収益体制を強化すべく事業計画を策定中であります。

今ひとつの課題といたしまして、先に述べました収益体性強化のもとさらなるリユース・リサイクルへの積極的な投資を行い地球環境保全、資源循環社会への貢献がお世話になった関係者の皆様へのお礼であり、そのことこそが当組合の設立の意義であると考えております。

今後日本はもとより世界に自動車リサイクル先進県としてリサイクル関連情報を発信してまいりたいと職員一同念願しており、また、"環境の世紀"を認識し、環境資源循環型分野での静脈産業として信念を持って担っていく所存でございます。

今後とも皆様のご支援・ご協力を心からお願い申し上げます。

アドバイザー　楠　文雄

同組合（通称MARC）は、二〇〇四年十一月に組合設立、翌〇五年十一月に操業を開始した自動車のリサイクル工場です。

使用済み自動車（ELV）を丁寧に解体し、リユース（Reuse）部品として活用、部品として利用できないものは資源に戻していく、すなわちリサイクル（Recycle）することにより、まさに「ゆりかご」に戻す業務に取り組んでおられます。

（ELVのリサイクルの流れ）

①まず、ELVは、タイヤがはずされ、同時にエアーバッグの処理、ガソリン・オイル類・LLCなどの液体を除去します。

②次に、リユースされる部品が丁寧に手作業で生産され、輸出用リユース部品、国内販売用リユース部品に選別されます。

③そして、鉄にリサイクルされる足回り部品、非鉄金属にリサイクルされるハーネス、アルミ部品等が除去され、

④最後に、ボディが、室内の従来シュレッダーダストになっていた樹脂・ゴム・ガラス等を含めプレス機にかけられます。このプレス品は、他の工場に運ばれ、電気炉にて溶かされ鉄にリサイクルされます。

このように、MARCでは、ELVを、丁寧な手作業によりリユース、リサイクルすることにより、シュレッダーダストを出さない処理がされており、最先端のリサイクル業務を推進していることによって、社会的にも大きな期待を寄せられています。

また、特筆すべきは、このリサイクル業務の運営を二～三十代の若者たちが、創意工夫を重ね一年で見事に創り上げ、現在では、月間一〇〇〇台を超えるELVのリサイクルを実現していることにあります。

この十二月十五日には、操業開始後一〇〇〇〇台解体を達成しました。操業開始当時は、一日に二～三台の解体しかできなかったと聞いております。従業員の皆さんの、リサイクルに向けての情熱で成し遂げられた功績であると感動を覚えます。従業員の皆さんに改めて敬意を表するところです。

しかしながら、短期間での急激な生産能力の向上は、安定した、継続的な工場運営の視点では、まだまだ課題を残していると考えます。生産設備の保守と安全管理、予知、予測が可能な効率的な生産管理、あわせて実践していく人材の教育・育成など、工場を運営していく仕組みづくりが課題であります。

すでにISO一四〇〇一の認証取得を目前にし、この機会に、工場の仕組み作りの第一ステップとして作業標準類の整備、施設・設備の保守点検作業の見直しと標準化、各種資格の点検等々基本に立ち返った取り組みを開始するよう、ものづくり動く支援室としてアドバイスさせていただきました。十二月、月産一二〇〇台の新記録になる目標にチャレンジしつつも、工場仕組み作り第一ステップの取り組みを開始いただいております。ここでも、若い従業員の皆さんのアイデアと、操業開始から培ってきた総合力が十分に発揮されるものと期待しております。

狙いは、「計画ありき、進捗管理をしっかり行うマネージメント」「収益体質の確保」「自信を持って見せられる工場環境」にあり、若い活力のみなぎる職場を維持できるようものづくり支援室としてお手伝いをする所存です。MARCの体質強化が加速度的に進み、名実ともに「日本を代表する自動車リサイクルセンター」の実現に努力されますことを念じております。

コラム　三現主義

企業訪問では出来るだけ現場を見学させて頂いている。現場は経営の縮図と云われるように経営者の方針や想いが反映されているように思う。自ら開発した新製品の説明を油手で実演してくれた社長、三十分も離れた関連工場の現場までわざわざ案内してくれた社長もいる。それぞれ自社の製品や現場について「どう思うか？」と執拗に感想を聞いてくる。何か新しい気付きがあればすぐ試し改善する由である。どこの社長さんも現場のことについては熱心でよく知っている。反面「これでいいんだ！」というマンネリ意識もあろう。

アドバイザーのような第三者に遠慮なく見て貰い、意見や支援を求めることにより新たに気付く問題も出てくる。それが意外に重要な改善事項の場合もある。市場や顧客ニーズの変化に対応しながら効率よく付加価値を生んでいくためには、現場を毎日改善し変化させていくことが重要である。今こそ「現場重視の経営」に注力して頂きたいと思う。

熱く、高くそして優しく…今年も前進しましょう。

（S・T）

半年の活動を踏まえ 市長・会頭に報告

事務局企画　桜本　昭

支援室はこの半年間の成果を活動実績として精査し現場の声を代表しアドバイザー自らがトップ報告を行った。スタートを切って九か月、節目として活動状況を運営委員会にはかり市長および会頭に出席いただき現場の声を届けることとなった。

十一月六日、市庁舎十二階会議室で関係者十余名が席に着きこわばった笑顔の中始まった。張り詰めた空気も議論が白熱する頃には普段のペースに戻り余裕が見えてきた。

上期活動は目標を達成し満足の行く形で終えたと総括し、アドバイザーの努力と苦労の甲斐あっての成果として報告を結んだ。

◇上期活動報告要旨

一、計画どおりの成果は出たか

二、活動からわかったこと

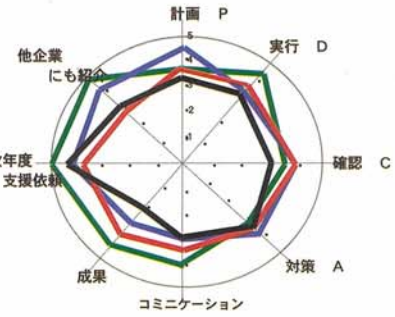
三、上期の問題・課題から今後の取組等

一時間を超える報告と質疑となった。市長からは「この事業についてはじっくり焦らず時間をかけて信頼を確保していくことが重要である。そのための基盤作りが今は必要である。この半年の活動で会議所と市の連携は促進してきている。また、会議所は六十年の実績もある。会議所に入った中小企業の困りごとを支援室に情報提供いただくという体制が確立できるとよい。逆に支援室に経営課題の相談があれば支援室から会議所へと連携していく。鈴鹿市ならではの特徴を出し、実績を積めば、自然と申込は増えていく。アドバイザーの方々の今後の取組みに期待したい。」と力強いコメントをいただいた。

また、会頭からは「鈴鹿商工会議所としては中小企業振興部の経営指導課と支援室との連携を強化していきたい」と、より具体的な方向が示された。

▲トップ報告会

利用者満足度



支援完了　代表４社　聞き取り調査結果

次年度も支援を受けたいと高ポイントを得た

では、支援活動を受けた利用企業の声はどのようなものか、聞き取り調査結果によると、八つの質問項目に対しての回答は五点満点に対し四点と高い評価をいただいており、「限られた回数や期間の支援で終わらず、さらなる継続支援をいただきたい」とか「来年度もまた支援を得たい」との声も寄せられた。

トップ報告会の詳細内容は十二月十一日に支援メンバー全体会議にて周知しております。

◇トップ報告会を受けて

集中討議

前述のトップ報告会を受け十二月四日、市・商工会議所・企業ＯＢアドバイザーで終日集中討議を行った。上期の反省とトップのコメントを受け、今後の取組みについての議論となった。

集中討議の前に各々のベクトルを合わせるためにいくつかのルールを設け混乱を避けることにした。その中の一つに会議の成果として支援室の将来ビジョン策定と平成十九年度活動計画骨子作りを求めた。多くの問題から重点指向で八項目に絞り込み、原因・課題を見つけ出し、まず将来ビジョンの策定から本格的な討議が始まった。午後に入って次年度重点方針を立て計画を練り上げた。気が付けばもう辺りに夕闇が迫っていた。

支援室として初めての集中討議で良かったことは全員の意識を普段とは違った形で議論に噛み合わせることができたことだ。またまた新しい発見をした。集中討議の成果としては短中長期計画を立てることができた。これらは毎年見直し、精度を上げていくことを確認した。

この計画は事務所に保管しておりますので是非ご覧ください。また、機会あるごとに紹介したいと考えています。どうぞよろしくお願いいたします。ちなみに平成十九年度の行動要件は基盤の整備期間でもあることから、利用者の満足度を高める取組みを優先とし、量より質的進化を求めています。最も現場に近い支援メンバーの方々には企業の監督者や作業者との接し方・指導方法等、なお一層の熱意と工夫が必要となってまいりますが、今後の取組みとして現場支援活動のモデル事例等の勉強会や情報支援会の場をもつスキルアップのための工夫も計画に盛り込みたいと考えていますのでご期待ください。

▲集中討議

特許

特許取得のすすめ

アドバイザー　長峰　隆

【経営に活かそう知的財産】

知的創造活動によって生み出されたアイデアは、創作したもので、特許権や著作権などが含まれます。新しい技術は特許権として保護され、新しいデザインは意匠権として保護され、商品の名称等は商標権として保護されます。

【特許の活用】

特許権や意匠権等の知的財産は企業活動においてますます重要になっています。特許の活用は「新規事業創出の鍵」ともなり、ものづくりにおける技術開発等、せっかく苦労して新技術を確立しても特許等の出願をしておかないと他人に真似されても文句が言えないのです。

◇従って自社の技術に

一、新規性が有るか知りたいとき、

二、特許の最新情報を知りたいとか、

三、知的財産の活用で困ったとき等、ご相談ください。

【特許に結び付いた事例】

（特許第三八四八六五七号）

【名称】中水道用貯留槽、鈴鹿防災（株）久畑社長より雨水の活用方法の構想を聞きその内容が特許要件を備えておることを直感し、その新技術内容の整理と先行技術の特許調査を行い、次いで特許出願準備を進め弁理士の紹介、特許出願後特許庁の先行技術無料調査支援制度を活用し、実体審査を得て特許成立。

◇その他知的財産に関する県の支援機関（知的所有権センター等）、国の支援制度（先行技術の無料調査、早期審査等）等是非活用してください。

〔官庁〕

三重県知的所有権センター

特許情報活用支援アドバイザー　長峰　隆氏

鈴鹿市ものづくり動く支援室　代表　大原　勝氏

〔財〕三重県産業支援センター

特許事例

雨水の有効利用

中水道用貯留槽

（特許第三八四八六五七号）

鈴鹿防災株式会社　代表取締役　久畑久一郎

【商品開発のきっかけ】

スズカ産学官交流会の「物づくり研究会」に所属。会員企業や研究者の自由な発想・提案から、新製品・新技術開発のヒントや研究テーマを見出す「産学官技術サロン」（定例的に開催）『サロンの時間に社会に貢献できるもの』を作りたい。

【動機】

一、テレビの環境番組から、東京のヒートアイランド対策（下町の打ち水）

二、鈴鹿市における下水道の急速な普及により、上水道の使用量に応じて、下水道料金を決定。水道料金がこれまでの約一、五倍に…

三、ＩＳＯ一四〇〇一の継続的改善とビジネスモデルの研究

四、本業（消防施設工事業）のエコ商品拡充と関連商品の開発

【商品開発への取組み】

産学官連携によりアドバイスを受けた方々。

〔産業〕三重執鬼／ヤマモト／三恵工業／飯田建設／サンケン／イトウグリン／シキボウ／ＯＢ田口清氏

〔学校〕

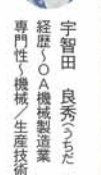
鈴鹿工業高等専門学校

副校長　齋藤正美氏

校長補佐　小倉弘幸氏

材料工学科教授江崎尚和氏

アドバイザー紹介



宇智田　良秀（うちだ　よしひで）

経歴～ＯＡ機械製造業

専門性～機械／生産技術業務

三年前に定年退職し、家内から粗大ゴミ扱いをさける為に、二～三の中小企業より改善業務を依頼され、八日／月程度活動しています。

その経験を生かし、ものづくり動く支援室に登録し試行一社を担当させてもらいました。支援活動を通じ感じた事はどの企業も毎日が忙しく、その日の事を片付ける事が精一杯であり、改善したい事は沢山有るが実行に移せないのが現状です。そこであるべき論を押し通す事なく、支援企業のスタッフの一員になったつもりで、資料、文献等は出来る限り当方で準備し、現場の負担を軽くし、一緒に活動する事が大事だと考えています。

又一方、環境の違いから今迄経験していない事も経験出来、新鮮な気持ちになり得られるものも沢山有ります。

元の会社の同僚である藤本ＳＡと一緒に、微力ですが支援企業、鈴鹿市の活性化の為頑張りたいと思います。

産業フェスタ

リーディング産業展 みえ二〇〇六

支援室は、十一月十日・十一日に四日市ドームで開催された「リーディング産業展みえ二〇〇六」に鈴鹿市ブースにて出展いたしました。

この産業展は、新産業や新市場に果敢に挑戦する企業の開発した技術や製品をアピールし、販路拡大に結びつけることを目的としています。これからも支援室は意欲的な企業の集まる場に積極的に参加していきます。（伊藤）

コーチング研修（報告）

鈴鹿市産業振興部産業政策課　副参事　吉岡和彦

十二月十一日のＳＡ全体会議のプログラムとして、コーチング研修が開催されました。「中小企業との上手な接し方」をテーマに、百五経済研究所経営情報グループから大地勉マネージャーを講師にお迎えし、「中小企業の特徴」や「中小企業経営者と接する際の注意点」など、長年に渡る実体験に基いたアドバイスをいただきました。

中小企業では、経営者のカラーが企業風土・文化と同義語であり、企業の意思決定は迅速に行われる反面、大企業と比べ企業組織が脆弱なことから、社内規程類整備の遅れや慢性的な人材不足に悩む経営者も少なくありません。職員一人当たりに課せられる業務も多岐にわたるため、幅広い知識と洞察力が必要とされる一方、専門性の高い技術者は育ち難い環境にあります。

このため、大地講師から「示唆いただいた事項を踏まえ、アドバイザー皆様におかれましても、中小企業経営者の話に耳を傾けながら相互の信頼を高めていただき、大企業の論理が先行せぬよう中小企業の目線（立場）に即した現場力の向上と課題解決型の実践指導に向けて、引き続きご尽力を賜りますようお願い申し上げます。

編集後記

『広報ものづくり』第三号（新春号）を発行する運びとなりました。昨年九月に皆様の情報の共有化、コミュニケーションの場になればとの思いで、創刊号を発行しました。企画・編集・校正など、ものづくりの原点にならい、手作りを基本としています。精読いただきご意見ご指導をお願いします。

新年も『ものづくり動く支援室』が企業の皆様の期待に応えられるように、またより多くの企業に認められ、使ってみたくなるように活動してまいります。（門平）